

十全會誌 第四號

(明治三十年十一月二十五日發行)

原著及實驗

◎ 免疫論

中濱東一郎

人畜ヲ論セズ某病ニ罹リ易キモノト否ザルモノトアリテソノ罹リ易キヲ素因[○]アリトイヘ否ザルヲ免病質[○]アリトイヘ傳染病ニ限リテハ免疫質[○](免疫性[○])アリトイフ

免疫質ハ動物種ト疾病種トノ異ナルニ從ヘテ著キ差アルモノニシテ例之バ家鼠ハ鼠敗血病ニ罹リ易シト雖野鼠ハ之ニ感ズルコトナキガ如シ

免疫質ニ先天[○]、後天[○]ノ別アリ甲ハ人獸トモニ生レナガラ此性質ヲ有スルモノヲ云フ前例ノ野鼠ハ鼠敗血病ニ對シテハ先天性免疫質アルモノナリ其他犬ハ生來殆ド脾脫疽ニ罹ルコトナキ等皆先天性免疫質ノ例ナリ後天性免疫質トハ天賦トシテ傳染病ニ罹ル性質アルモノ一タビ此病ニ罹リテ全治シタル後ハ再ビ同一病ニ感ゼザルヲイフ痘瘡、麻疹ノ如キ是ナリソノ此質ヲ來スコトハ病ノ輕重ニ大關係アルヲナク極メテ輕易ノ痘瘡ニ罹ルモ重症痘瘡ニ同ジク能ク免疫質トナルモノナリ近來傳染病ノ病原菌又ハ其毒物ヲ獸ニ與ヘテ免疫質ト爲スコト大ニ行ハル之ヲ人工免疫法ト稱シ此法ニテ得タルヲ人工免疫質ト云フ此法タルヤ獸類ニ於イテハ諸種ノ傳染病ニ對シテ已ニ良成績

ヲ得タリ殊ニ傳染病ノ全治スルハ其病獸ノ此病ニ對シテ免疫質トナルニ外ナラサレハ特リ健康ナル獸類ヲシテ免疫質トナラシムルノミナラズ更ニ進ンテ已ニ發シタル病ノ治療ニモ之ヲ應用スル迄ニ至リタリ然レドモ今日ニ至ル迄人ノ傳染病ニ對シテ確實ノ効驗アルモノハ甚タ少數ニシテ僅ニ恐水病ト實布埜里亞トノ二病ニ過キス彼ノ虎列刺、腸窒扶斯、肺炎、「ペスト」ノ如キ傳染病ニモ奇効アリト唱フルモノナキニ非ザレドモ毫モ信スルニ足ラス

人工免疫法ニ關スル實驗ト學說トハ甚タ複雜多端ニシテ往々反對又ハ錯誤ノコトアルヲ免レンス、カレハ此事ニ關シテ其梗概ヲ擧ケ緊要ノ點ヲ論述スルハ醫學上趣味ナキニアラサルヘケレハ予ハ今茲ニ之ヲ試ミン但シ成ルヘク諸家ノ論說ハ之ヲ省キ直ニ事實ヲ述ヘントス

之ヲ爲スニハ今日ニ至ル迄最モ精シク研鑽實驗セラレタル實布埜里亞ニ於ケル免疫法ニ就イテ論述スルヲ最モ便利ナリト考フレハ左ニ記述スル所ハ專ラ此病ニ關スルモノナリ

抑々實布埜里亞ハ特種ノ桿菌ニ因リテ發シ此病原菌ハ一種ノ毒物ヲ産スル等ハ夙ニ人ノ知ル所ナリ今若シ此菌ノ培養物ヲ天竺鼠ノ皮下ニ注入セハ此獸ハ忽チ發病シテ數日ノ後ニ斃レン此菌ノ培養物ヲ熱シテ病原菌ヲ殺シタルモノ所謂滅菌シタルモノヲ用ヰルモ其成績ハ同一ナリ是レ此培養物中ニ生活シタル病原菌ハ熱ノ爲メニ死滅シタルモ毒物殘存シ一定程度ヲ超過セサル熱ニ遇フモ破壞若クハ變化セサルニ由ルナリ

右ノ如ク病原菌若クハ毒物ヲ注入セハ獸數日ヲ出テスシテ斃ルトイヘトモ若シ適當ノ方法ヲ以テ豫メ動物ヲ處置(人工免疫法)スルニ於イテハ此菌又ハ其毒ヲ注入スト雖斃死スルコトナシ

實布埜里亞ニ對スル人工免疫法ニハ左ノ諸種アリ

第一、弱メタル病毒ヲ用ヰルモノ

第二、弱メサル病原菌及ヒ病毒ヲ用ヰルモノ

第三、實布埜里亞菌又ハ其毒物ヲ用ヰスシテ單ニ化學的ノ物品ヲ用ヰルモノ

第一ニ屬スルモノ左ノ如シ

一、攝氏六十五度ヨリ七十度ニ熱シタル實布埜里亞菌培養物ヲ動物ノ皮下ニ注入ス

二、第三格魯兒化沃度、「トリクレゾオル」、石炭酸、「ホルムアルデヒド」、沃度沃度加里ノ如キ化學的ノ物品ヲ以テ實布埜里亞菌ヲ取扱ヒタルモノヲ注入ス

(約四週間ヲ經タル肉羹培養物ニ石炭酸〇、五%又ハ「トリクレゾオル」〇、三%ヲ加ヘテ靜置スレハ病原菌ハ沈降シテ上部ニ澄明ノ液分離ス此液中ニ、毒物ヲ含ミ大ナル動物(馬)ヲ免疫質ト爲スニ使用シ用量ハ初メハ〇、五立方仙迷ヨリ一立方仙迷ヲ注入シ後ニハ毒力ノ強弱ニ從ヒ數十若クハ百立方仙迷以上ニ至リ注入ノ都度反應ヲ起サシムヘシ)

第二ニ屬スルモノ左ノ如シ

一、實布埜里亞菌ノ培養物及ヒ其毒物ヲ直ニ注入ス(極少量ヲ以テ始メ漸ク其量ヲ增加ス)

二、毒物ヲ獸ニ食マシム(天竺鼠、兔、犬等)

第三ニ屬スルモノハ左ノ如シ

過酸化水素ヲ以テ獸ヲ取扱ヒ又ハ此病ニ罹リテ全治シタル獸ノ血清ヲ使用ス

以上ノ他第一、第二ヲ併用スル法アリ即チ初メ弱メタル毒物ヲ注入シテ後漸ク弱メサル毒物ヲ用キルモノ是ナリ、ブリイゲル、ワツセルマン、北里等ハ胸腺越幾斯ヲ實布埤里亞菌ノ肉羹培養物ニ混ジ且之ヲ熱シテ動物ニ注入スレハ能ク其目的ヲ達シ胸腺ノ細胞成分ニ一種特異ノ物品アルカ爲メ動物ニ免疫質ヲ附與スト説ケリ若シ此説ニシテ確ナルニ於イテハ右方法ノ第三中ニ入ルヘキモノナレトモ諸家ノ實驗ニ據レハ北里等ノ説ハ其期スル所ニ違ヒタルヲ證明セラレタリ (Behring, Die Geschichte der Diphtherie S.154)

人工ニテ免疫質ヲ附與シタル獸例之ハ馬ノ血液就中血清ヲ檢スレハ一種特別ノ性質アルヲ發見スヘシ

此性ハ免疫質ヲ有セサル普通ノ獸ニハ曾テ認メサルモノナリ若シ人工的免疫質トナリタル獸ノ血清(血液)ヲ實布埤里亞ニ感スヘキ獸ノ皮下ニ注入スルトキハ能ク免疫質ヲ附與スルモノニシテ之ヲ他動的免疫質 *Passive Immunität* ト稱シ病原菌又ハ病毒注入ニ由リテ免疫質ト爲シタル者ヲ自動的免疫質 *active Immunität* トイヒテ以テ之ヲ區別ス

(有効ナル血清ヲ多量ニ製スルニハ大ナル獸ヲ自動的免疫質トナサシメ其靜脈ヨリ血液ヲ採リテ氷室ニ靜置シテ血清ヲ收容シ之ニ石炭酸〇、五%ヲ加ヘテ貯フ、此目的ニ使用スル獸ハ馬ヲ最モ宜シトス)

然レハ人工免疫質ニ他動的、自動的ノ二種アリテ甲ニアリテハ有力ノ血清ヲ注入スレハ直ニ動物ニ其性質ヲ附與シ注入シタル血清ノ量益々多クレハ免疫質益々著シ斯方法ニテ免疫質ヲ附與シタ

ル動物ノ血清ハ他ノ動物ヲシテ免疫ナラシムル性質ナク且注入シタル血清ノ十分ニ體內ニ存スル時ノミ此性ヲ有スルカタメニ注入シタル血清中ノ有効成分ハ身體ノ分泌器ニヨリテ徐々體外ニ排除セラレ遂ニ全ク免疫質ヲ失フニ至ル是レ他動的免疫質ヲ有スル動物ハ其體內ニ於テ有力ノ血清ヲ産スルコトナキガ爲ナリ

之ニ反シテ自動的免疫法ニ於テハ病原菌又ハ病毒ヲ注入スル毎ニ徐々免疫ノ度ヲ増スモノニシテ其都度多少ノ病徵(主トシテ熱發ス)ヲ呈スヘシ依テ其平癒スルヲ待チテ更ニ少シク毒ヲ増シテ注入シ之ヲ反復スルコト益々久シケレハ免疫質益々著ク且著ク有力ナル血清ヲ産スヘシ是レ自動的ノ他動的ト異ナル所以ナリ

自動的免疫ヲ來ス時期ハ傳染病ノ種類、種接物(注入物)ノ用量、毒力ノ多少等ニ由リテ長短アリ最モ有力ナル毒物ヲ注入スルコトヲ得ハ速ニ高度ノ免疫質ヲ附與スルコトヲ得ヘシ一タビ高度ノ免疫質ヲ得シ獸モ後ニ至リ毒物又ハ病原菌ヲ注入セサルトキハ血清ノ効力漸次ニ減少スルモノトス然レモ血清ノ効力減少スルト共ニ免疫質ハ必スシモ減少スルニアラスシテ尙久シク之ヲ保有スルコトアリ、サレハ免疫質ト血清効力トハ必スシモ併行スルモノニアラスシテ最モ有力ナル血清ヲ産スル獸モ其免疫質ニ至リテハ却リテ少ナキモノアリ又之ニ反シテ免疫質著キモ必スシモ最モ有効ナル血清ヲ有スルモノニアラサルナリ

病毒ヲ注入スルニ由リテ免疫質ヲ生スル理ハ未タ詳カナラス「ブシヤル」Buchardハ曾テ毒物中別ニ一種ノ物體アルカ爲メニ獸ニ此性質ヲ附與スト説ケリ故ニ此説ヲシテ正鵠ヲ失セサラシムルトキ

ハ毒物ト免疫質附與物トヲ分チ甲ヲ棄テ乙ヲ採リテ獸ニ注入スルヲ捷徑トス、サレハ「ブシヤル」ハ此 Dogmaヲ崇拜墨守スル輩ハ皆此方針ヲ採リテ試驗ニ從事シタリ彼ノ「フレンケル」ノ實布埜里亞ニ於ケル北里、ブレイゲル、ワツセルマン等ノ破傷風、實布埜里亞等ニ於ケル皆此 Dogmaヲ確守シタル者ナリ何ソ知ラン毒物ト自動的免疫質ヲ附與スル物質トハ全ク同一物ニシテ毒物注入ニ由リテ反應起ル毎ニ免疫質ノ度ヲ増進スルコトヲ此發見ハ實ニ「ベエリング」其人ノ手ニ成リ彼ノ効力著クシテ人ノ實布埜里亞ヲ治スベキ血清ヲ製出スルヲ得シモ此發見アリシガ爲メナリ

先天性及ヒ人工免疫質ハ果シテ何等ノ差異アルカ此問題ハ學說及ヒ實際トモニ頗ル趣味アルモノニシテ其一部ハ己ニ前ニ記シタルガ如ク血液ノ性質ニ差アルモノ是ナリ先天性免疫質ヲ有スル獸ノ血清ハ他ノ獸ニ免疫質ヲ附與スル力殆ト之レナシト雖之ヲ精査スレハ其内ニ病原菌ヲ死滅セシムル物品ヲ含ムコトアリテ特リ動物ノ體內ニ注入シタル病原菌ヲ殺スノミナラス亦試験管中ニ於テ血清ト病原菌トヲ混同スル時同結果ヲ生ス「ブフェル」ハ此物質ニ Alexine ノ名ヲ附シタリ而シテ血中ニ斯ク病原菌ヲ殺ス性質アルニモ係ハラス他動的免疫質ヲ附與スルノ力ナキハ持リ每常必スシモ此物質アルニ非サルノミナラス亦其量極メテ少キニ由ルナラン

自動的免疫ノ原由ニ至リテハ種々ノ說アリテ未タ明白ナラス左ニ諸說ヲ約言セン病原菌體內ニ入リテ其發育生存ニ必須ナル營養物ヲ攝取消費シ盡スカ爲ニ將來病原菌再ヒ體內ニ竄入スルコトアルモ能ク生存増殖セスト曰フハ「バストオ」ノ消費說 *Enschlepfungstheorie* ナリ然レモ生活スル病原菌ノ他、毒物ノミニテモ免疫質ヲ附與スルコトヲ得ルガ故ニ此說ハ實際ニ適スルモノニアラス白

血球ノ働キニ由リテ病原菌ヲ滅ストノ「メチユニコフ」ノ喰胞説 Phagocytose モ亦タ同一ノ理由アリテ正カラス病原菌有害物ヲ體內ニ殘遺スル説所謂殘遺説 Retentionsstheorie モ亦缺點ナキニアラス「クルウゼ」ハ血中ニ一種ノ物質(「アメチリユジイネ」)發生シテ病原菌ヨリ生スル有害物ヲ中和シ無害ナラシメ菌ハ血中ニ存スル「アレキシイチ」ニ由リテ滅殺セラルト曰フ之ヲ抗害説 Antitysinetheorieトス而シテ抗害素ハ恐クハ自動的免疫質ヲ施ス際、組織細胞ノ補助ニ由リテ病原菌ノ分泌スル侵害物 Ty sine ヨリ生スルモノナラントイフ同氏ノ説ヲ約言スレハ免疫質ヲ有セサル獸ノ血中ニハ「アレキシイン」ノミチ含ミ免疫質ヲ有スルモノハ「アレキシイチ」ノ他抗害素ヲ含有ストイフ病原菌ノ毒物ニ對シテ免疫質トナル理由ニ至リテハ血中ニ一種ノ物質アリテ毒物ニ抗スルナリ而シテ此物質ニ制毒素 Antitoxine ノ名ヲ附シタリ制毒素ノ病毒ニ對スル働キハ未タ明瞭ナラサレトモ毒物ヲ破壊スルカ爲メニモアラス又化學的ノ抱合ニ於ケルカ如ク毒物ト化合スルカ爲メニ毒物ヲシテ無害ナラシムルニモアラスシテ毒物ト制毒素トハ依然存在スルヲ見ル只病毒ヲ無害ナラシムル所以ハ此二物ハ身體組織ノ上ニ相反セル働キヲ有スルニ由ル例之ハ一定ノ方向ニ運轉スル器械アリトセンニ今之ト同一ノ力アリテ反對ノ方向ニ加ハルトスレハ器械ヲ運轉スル力ハ消滅ス故ニ縱令ソノ形ヲ變セスシテ依然存スルモ器械ハ毫モ運轉セサルヘシ(Buchner, Deutschemed, Wochens. No. 45, 1894, Centani, Deutsche med. Wochens. 1893)

制毒素ノ血中ニ存在スルハ血中ヨリ之ヲ製出スルコトヲ得ルカ故ニ毫モ疑フヘキニアラス而シテ其反應ハ蛋白ニ類似スト雖之ヲ精製スルニ從ヒテ次第ニ其反應ノ減少スルヲ見ル近來又電氣ヲ以

テ直ニ病毒ヨリ之ヲ製スルコトヲ得ト云 (Smirnow, Berl. khn. Wochens. 1894—1895, Krueger, Deutsche med. Wochens. 1895) 若果シテ斯ノ如クナラハ制毒素ノ病素ヨリ發生シタルモノタルコト、以テ證スルニ足レリ

免疫質ニ制菌的 *antibacillare* I. 制毒的 *antitoxische* I. ノ二種アリ甲ハ病原菌ニ對シテ免疫質ヲ有スルモ其毒物ニ對シテハ毫モ之ニ抗スル力ナク普通ノ獸ト同様其病ニ罹ルモノタイヒ乙ハ毒物ニ對シテ免疫質タルモ病原菌ニハ全ク無力ナルモノタイフ

人工免疫法ニ由リテ得タル實布垓里亞ニ對スル免疫質ハ專ラ制毒的ニシテ虎列刺ニ對スル者ハ制菌的ナリ

而シテ制菌的免疫質ハ多ク虎列刺ニ就テ實驗セラレタレハ左ニ之ヲ述ヘン此病ニ對シテ免疫質ヲ有スル動物ハ單ニ虎列刺菌ニ對シテ然ルノミニシテ病毒ニ對シテ全ク無力ナルコトハ夙ニ證明セラレタリ (Ganaleia, Ann. de l'Instit. P. 1889) 最モ慎重ニ最モ注意ヲ加ヘ久シキヲ經テ免疫質トナシ致死量ノ虎列刺菌ヲ腹腔内ニ注入スルモ斃ル、コトナキ獸モ虎列刺毒ヲ注入スルトキハ忽チ斃死シ胃ニ此病原菌ヲ注入スルトキモ亦同シ最モ有効ナル血清ヲ用エテ他動的免疫質トナシタル獸モ亦毒物ニ對シテハ毫モ他ノ免疫質ヲ有セサル獸ト異ナルコトナク忽チ死亡スヘク加之ナラズ病原菌ヲ胃ニ注入スルトキモ普通ノ獸ト同ジク斃死セン (Klenjeren, Sobernheim, Pfeiffer) 以テ此免疫質ノ病毒ニ抗スルコト能ハサルヲ證スルニ足ル蓋シ免疫質ヲ有スル獸ノ胃中ニ送入シタル病原菌ハ腹腔内ニ注入シタルモノト異ニシテ久シク増殖發育シ以テ毒物ヲ產出シ其毒物ハ體內ニ入りテ獸

ヲ斃スナリ若シ否スシテ病毒ニ對シテモ有効ナラハ腸胃ノ虎列刺ニ對シテモ免疫質ヲサカルヘカ
ヲサルナリ

右ノ實驗ニ反シテ獸ハ能ク腸胃ノ虎列刺ニ對シテ免疫ストイフモノアリ。ブリイゲル、北里、ワツ
セルマン、ノ如シ(Zeisch. f. Hygiene B. XII)然レトモ新鮮ナル「コンマ」菌ヲ以テ之レヲ實驗スルニ
彼等ノ經驗ノ誤レリシコト明ナリ今日ニ至ル迄大多數ノ研究者ガ信スル所ニ據レハ虎列刺病ニ對
スル免疫、血清ノ効力モ之ニ同シハ虎列刺菌ヲ撲滅スルニ職由シ此菌ノ産スル毒物ニ對シテハ無
力ナリトス是ヲ以テ實際血清ヲ此病ノ豫防及治療法ニ使用センコトハ其望甚タ寡シ近時「ハフキ
ン」ハ印度ニ於テ此菌ノ培養物ヲ人身ニ注入シ數月間ノ自動的免疫質ヲ生スト云ヒ又已ニ之ヲ十
三四萬ノ生靈ニ施シタリト云フモ其成績ハ未タ明瞭ナラス

北里ハ古弗ノ方法ニ從ヒテ虎列刺菌ノ培養物ヲ胃中ニ送入シ(阿片丁幾一、〇ヲ注入シテ後、五%
曹達水五〇瓦、虎列刺菌肉羹培養
物五立仙)後血清二、〇乃至三、〇ヲ天竺鼠ニ注入セシニ毫モ効力ナク悉皆斃死シタリ北里ハ此
ヲ注入ス)不良結果ヲ阿片丁幾ノ作用ニ歸シ尙之ヲ證明セントテ豫メ阿片丁幾一、〇ヲ天竺鼠ニ注入シテ、
後虎列刺菌ト血清トヲ腹腔内ニ注入セシニ此亦斃死シタリ然ルニ注入物中ヨリ阿片丁幾ヲ除去
シテ而後注入スレハ斃死セスト云フ

此試驗ニ依レハ阿片ハ天竺鼠ノ死因タルカ如シ然レトモ上文ニ記スル他「ファイフェル」「ワツ
セルマン」等ノ試驗ニ依レハ生活菌ニ對シテ著キ免疫質ヲ有スル天竺鼠モ毒物ノミヲ注入スレ
ハ普通ノ獸ト同シク死スルコト明ニシテ(Zeisch. f. Hygiene B. XIV)「カリレネキイ」ハ之ヲ生後數

日ヲ經タル狗兒及ヒ猫兒ニ試ミ「メチニコフ」ハ之ヲ哺乳スル兔兒ニ試ミシニ「コレラ」菌ノ最小量ヲ口腔ニ注入スルトキハ動物必ス死シ自動的免疫質ヲ附與シ或ハ血清ヲ以テ他動的免疫質ヲ附與セシモノト雖一タヒ菌ヲ嚙下セシムレハ能ク死ヲ免ル、モノナシト云フ、サレハ多數ノ實驗者ハ北里ノ說ニ反シ古弗ノ如キモ新「ツベルクリン」ニ關スル報告(Deutsche med. Wochens. No. 14. 1897)中虎列刺免疫ハ病菌ニ對スルニ止マルコトヲ附記シタリ獨リ北里ハ十分ナル實驗ヲモ爲サス諸家反對ノ實驗ヲモ顧ミス遂ニ之ヲ人身ニ應用スルニ至リシコト予ノ服スル「能」ハサル所ナリ昨廿九年本所病院其他ニ於ケル血清療法ノ惡結果ハ蓋又止ムコトヲ得サルモノナリ上ニ記シタル如ク豫防ノ爲ニ注入スル血清既ニ病毒ニ對シテハ其効力ヲ有セス何ソ況ンヤ已ニ發病シタル者ヲヤ「テサルス」Lazarus(Ann. de l'Inst. P. 1894)及ヒ「イザン」Isaëff (Z. f. Hyg. B. XVI)等ノ試驗ニ依レハ病原菌ヲ注入シテヨリ半時乃至二時以內ニ血清ヲ注入スルニアラテハ發病ヲ防クコト能ハス而ルニ獨リ北里ハ七時間ヲ經ルモ尙其効力アリト云フ(傳染病研究所報告)豈疑フ可キニ非スヤ縱令北里ノ言ヲシテ信ナラシムルモ人ノ虎列刺ハ病原菌腸胃ニ入りテヨリ數日ノ後纔ニ病徵ヲ發スルモノナレハ診ヲ醫師ニ請フ時ハ已ニ復タ救フヘカラサル日時ヲ經過シタルモノナリ爭テカ奏効ヲ期セラルヘキ況ンヤ此血清病毒ニ對シテハ全ク無力ナルニ於テオヤ北里等ノ試驗ニ反シテ「メチニコフ」等 Metchnikoff, Roux, Touzelli (Toxine et antitoxine choleraïque, Ann. de l'Inst. P. 1896)等ハ從前人ノ未タ施サバリシ方法ニ由リテ一種ノ虎列刺毒ヲ製造セリ之ヲ用非テ動物ニ免疫質ヲ附與スレハ動物能ク毒物ニ抗スルノミナラス其所産ノ血清ハ又充分虎列刺

毒ニ抵抗スヘキ免疫質ヲ他動物ニ附與スト云フ此實驗ニシテ信ナランカ虎列豫防及治療法ハ此方面ニ於テ多望ナリト云フヘシ

◎佝僂病ニ就テ

藤井伊之吉

佝僂病ハ歐州ニ在リテハ極メテ要用ナル小兒病ノ一ニシテ從フテ其數ノ夥多ナルハ諸家ノ報告ニ徴シテ明ナリ(總小兒病ノ三分ノ一ヲ占ムルノ地方少ナカラス)然ルニ本邦ニ於テハ極メテ稀有ニシテ殆ント之レカ存否ヲ疑ヒツヽアリシカ三宅醫學士ノ「佝僂病性膝外髌」ノ報告(中外醫事新報第三百七號及第三百八號)ヲ初メトシ瀨川醫學士ノ「日本ニ於ケル佝僂病」ト題スル二例ノ報告アリ(中外醫事新報第三〇九號)三宅醫學士ハ再ヒ佝僂病性内髌脚ノ一例(中外醫事新報第三一七號)ヲ記載シ野田教授モ亦曾テ佝僂病治療後ノ一例ヲ(東京醫事新誌?)公ニセラレタルヲアルヲ聞ケリ其他予ノ不充分ナル檢索外尙一二ノ報告之アリヤ計リ難シト雖モ兎ニ角本邦ニ於テハ甚タ稀有ナルモノナルヘキヲ信シ頃日著シキ佝僂病ノ一患者ヲ檢檢セシヲ以テ直チニ之レヲ恩師木村教授ニ告ケ尙ホ恩師ノ經驗ニ就キ垂教ヲ仰キシニ恩師ハ此地ニ來リシ以來十數年間ニ於テ其輕度ニシテ疑ハシキ者ニ遭遇セシヲ擗ナカラスト雖モ著明ナル者ハ昨年初メテ一患者ヲ目撃セシニ過キス今共ニ之レヲ記載セハ稍々好味アラント乃チ茲ニ餘白ヲ汚スニ至レリ本病ハ己ニ古代ニ於テ二三ノ人ニ由リテ記載セラレ中古ニ及ントテ僅カニ増補スルヲナキニアラサレモ十七世紀ノ始メニ當ツテ北部歐羅巴殊ニ英國ニ於テ大ニ猖獗ヲ極メTignonハ稍々精確ナル調査ヲナシテ之レヲ藉載ニ叙述シ所謂英吉利病ナル別名ハ氏ニ據リテ附與セラレタル者ナリ爾來歐